

〈原 著〉 第50回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

看護助手増員に伴う人材活用の効果についての考察 ～自主的な学びの促進～

柏原赤十字病院 看護部

雛倉 恵美 杉上 恭子 堀池 由美子 上田 サユリ 高橋 高美

A study on the utilization of human resources associated with the increase of the number of the
nursing assistant staff
～ encouragement for self-improvement ~

Emi HINAKURA, Kyoko SUGIGAMI, Yumiko HORIIKE, Sayuri UEDA, Tkami.TAKAHASHI

Japanese Red Cross Kashiwabara Hospital

Key Words : 看護助手、看護助手会の存在、意識の変化

【はじめに】

当院は、兵庫県の中東部に位置し実働病床105床の小規模病院である。訪問看護ステーションや健診センターを併設しており、予防から在宅までを担いながら地域の健康管理に携わっている。看護部長になった平成19年10月は、地域の支援を受けて再建が決定された後であったが、医師の増員や増床に伴う看護師確保が困難であったため、早期より看護助手を増員してきた。今日までの7年間に、1単位59床から2単位105床に、電子カルテやSPDの導入や多職種の採用も増えたが、看護師確保困難な状況が継続し、日常生活援助や夜勤への組み入れも考え、看護助手を5名から16名に増員してきた。増員とともに徐々に主体的に活動していく看護助手と関わる中で、看護助手自身はこれらの変化をどのように捉えているのかを知り、今後に生かしたいと考え調査を行った。

【目 的】

看護助手を増員した過程において看護助手の病院や地震に対する意識の変化を知る。

【方 法】

平成26年5月当院看護助手（非正規含）16名を対象に独自の記述式アンケート用紙（無記名）と看護助手の実施状況調査票を用い、調査協力については、提出によって協力意思とすることを説明し、同意を得て実施した。結果15名より回答を得た。（回収率93.8%）

【結 果】

- 1) 看護助手会は、看護助手と看護部長で月1回開催している。看護助手の平均年齢は48.6歳、平均在職年数は7.1年である。
- 2) 看護助手業務の実施状況は、経験や患者さんの状況により異なるが、ほぼ全員が「一人で実施できる」又は「看護師とともに」と回答した。（図1）

看護助手の業務内容		
一人で実施 ○ 看護師とともに △ できない ×		
生活環境に 関わる業務	1) 病床及び病床範囲の清潔・整備	○
	2) 病床環境調整	○
	3) リネン類の整理	○
日常生活に 関わる業務	1) 身体の清潔に関する世話	○ △
	2) 病衣・寝具の交換	○ △
	3) 排泄に関する世話	○ △
	4) 食事に関する世話	○ △
	5) 姿勢を保つ・活動を整える	○ △
	6) 運動・移送に関する世話	○ △
	7) 患者の見守り	○ △
	8) 死亡時のケア	△ ×
診療の補助に 関わる業務	1) 検査処置に必要な機械・器具等の準備片付け	○
	2) 入院・退院・転出等に関する準備	○
	3) その他 メッセンジャー業務等	○

※参考資料「看護補助者の業務範囲とその教育等に関する検討報告書」日本看護協会業務委員会、1996年9月

図 1 看護助手業務の実施状況

3) アンケートの質問内容は助手の思いを聞くために自由記載を多くした。(図2)

アンケートの質問内容	無記名	回収率 93.8%
1. 年齢		
2. 当院での在職年数		
3. 以前の看護助手経験の有無		
4. 看護助手の仕事を選んだきっかけ		
5. 看護助手として困っていること		
6. 看護助手の仕事を選んでよかったと思うこと、悪かったと思うこと		
7. 以前(7年前頃または採用時)と比較した病院の変化		
8. 以前(7年前頃または採用時)と比較した自身の変化		
9. 看護助手を続ける理由		
10. 自身にとっての看護助手グループの存在		
11. より自主的な学びができるために病院の支援		
12. より自主的な学びができるために看護助手会のあり方		
13. より自主的な学びができるために自身のあり方		
14. 看護部長に何かあれば		

図 2 アンケート質問内容

アンケートの回答から一部を紹介しながら報告する。<7看護助手がとらえた病院の変化>について「以前は看護師と看護助手の間に溝があるように感じていたが、今は認められるようになり」「コミュニケーションがとれるようになった」「電子カルテやSPDの導入により助手の仕事が変化し患者さんにケアできるようになった」「全体的に活気ができ」「助手のパワーが前向きになった」と捉えていた。<8看護助手自身の変化>については、「患者さんとのコミュニケーションがうまく取れるようになった」「単に仕事をこなすだけでなくチームの一員として働ける自分でありたいと思えるようになった」「笑顔で仕事ができるようになった」「職場改善や患者さんの身の回りの安全や改善に意識が向くようになった」と答えている。<10看護助手会のグループの存在>については、「同じ思い、

同じ考え方で仕事ができる」「悩みの相談もできる、職場で一番身近な存在」「みんなが同じ方向に向かって行動できるグループ」と捉えていた。<6看護助手の仕事を選んでよかったこと>について「患者の笑顔」や「優しい言葉に看護助手自身が元気をもらえること」や「ありがとうという患者やご家族、看護師からの言葉が励みになる」と答えている。<13看護助手自身がより自主的な学びのために必要なこととして「介護の知識技術の向上」や「積極的に看護助手会に参加する」など個々の行動を具体的に示していた。

看護助手会は、患者さんの療養環境をよくするためにディルームに季節ごとの飾りつけをしたり、リハビリスタッフの指導を受けながら院内デイケアを企画運営し、患者さんに喜んでいただいている。

【まとめ】

当院は、看護師不足を補うため看護助手を増員して、夜勤への導入など早期から看護師の業務負担軽減につなげてきた。今回の調査で看護助手は、当院の変化をスタッフとコミュニケーションがとれるようになったり、患者へのケアができるようになったことを前向きに捉え、全体に活気が出てきたと捉えていた。看護助手自身についても患者とのコミュニケーションがとれるようになったり、チームの一員として患者への思いを強くしたり、職場改善に意識が向くようになってきたと評価していた。それらを支えているのは、患者や看護師の「ありがとう」の言葉や笑顔であり、看護助手会の存在であることが伺えた。今回の結果をさらに推進するためにも看護助手の自主性を大事にしながら看護助手会を支え、看護師・看護助手の協働チームとして、安全で質の高い看護を提供していきたい。

看護助手の活動の実際

